

**主 題：聖書の知恵を追い求めて③：癒しの舌 or 剣の舌****聖書箇所：箴言 随所**

この朝も皆さんと続けて学ぶのは、箴言のみことばです。特にきょうは、私たちの「舌」——「ことば」について教えているいろんな箇所を見ていきたいと思いますが、その前に、次のことばを自分のこととして考えてみてください。このような内容をひとりの牧師が著書に記していました。「『話す』というのは、あまりにも日常的で、当たり前で、大したことの無い行為のようにも思えます。けれども実際は、私たちの生活の中でこれほど重要なことはほとんどありません。この日常的な行為の背後には、大きな戦い、日々繰り広げられる『言葉の戦争』が存在しているのです。……私たちの中で人の言葉に傷ついたことがない人などいるのでしょうか？自分の発言を後悔したことがない人などいるのでしょうか？言い争いの仲裁に立たされた経験のない人などいるのでしょうか？愛する人と真剣に話し合いたいのに、時間が足りないと感じたことの無い人などいるのでしょうか？私たちの中で、「自分の言葉はいつも状況に適切で、優しさに満ちている」と言い切れる人などいるのでしょうか？」。もう言うまでもないと思いますが、私たちにとって「ことば」は欠かせないものです。これが本当かどうかはわかりませんが、ある一つの研究結果によれば、男性は1日に平均7千語、女性はなんとその3倍となる平均2万語を話していると言われていたりもします。また、実際にことばを話さなかったとしても、私たちは普段からメールやLINEなどを通じてだれかとコミュニケーションを取っています。この点は、子どもからおとなに至るまで関係ありません。朝起きてから夜寝るまでの間、それぞれがさまざまな場面でことばを口にし、まただれかのことばを聞きながら過ごしています。私たちの日常生活は、文字どおりことばにあふれているのです。

そして残念ながら、あたりまえのようにあふれていることばであるからこそ、時に私たちは、その「ことばの持っている力」というものを忘れていることがあります。それがもたらす影響を考えずに、何となく用いることがあります。そしてその結果、私たちはことばで大きな失敗や罪を犯してしまうことがあるのです。どうですか？これまでの歩み、いや、先週一週間の歩みを振り返ってみても、自分の発言を悔やんだことはどれほどあったでしょうか。自分の口から出ていくそのことばを、自分の口の中にもう一度引き戻したいと思ったことは、どれくらいあるでしょう。果たして今私たちは、自分自身の舌が持っている力を正しく覚えているのでしょうか。

箴言12：18に、こんなことばがあります。「軽率に話して人を剣で刺すような者がいる。しかし知恵のある人の舌は人をいやす。」と。確かに、私たちの「舌」は、からだの中では比較的小さな器官の一つです。普段の生活の中であって、さほど注目されるようなものでもないでしょう。しかし、実際にそれが持っている影響力というのは、測り知れないものでした。「舌」はだれかを深く傷つけ、苦しめ、死に至らせるだけでなく、何よりも神様を悲しませるような危険な武器となることもあれば、同時にだれかを励ましたり、強めたり、心を回復させるだけでなく、神様を賛美する「いやし」となることもできるものでした。どのようにして舌を使うのかは、ひとりひとりの歩みに、いや、生死に関わるような深刻な問題だったわけです。だからこそ今朝は、そんな大切な「舌」について、改めて神様が教えてくださる「知恵」というものを一緒に考えてみましょう。これから見ていこうとしているこの箴言には、ほかのどんなテーマよりも「ことばについての知恵」が多く記されています。それらの知恵のことばに、きょうは時間の許す限りしっかりと耳を傾けてみましょう。

ただ皆さん、その際に一つだけ覚えておいてください。私たちがみことばを学ぶときに経験する大きな誘惑——それは自分のこととして考えるのではなく、ほかの人にすぐ当てはめてしまうことです。こ

んなことはありませんか。メッセージを聞きながら「この教え、あの人が聞いていけばいいのにな」と思ったり、聞きながら「やっぱりあの人が言ったことはおかしかったな」と。そうやって焦点を自分ではないだれかにずらしたくなることがあります。ましてやこれから見ていくことばの問題になれば、なおさらそう思うかもしれません。でも、神様の前に問われるのは、いつも自分自身でした。

かつてイエス様も、はっきりとこう言われています。マタイ 12 : 36 に「わたしはあなたがたに、こう言いましょう。人はその口にするあらゆるむだなことばについて、さばきの日には言い開きをしなければなりません。」と。ほかのだれか、ではありません。まず自分、でした。自分のことばが剣になっていないのか。たとえことばで失敗したとしても、いやしをもたらすことばとして変えられているのかどうか。今回は箴言全体から、「知恵ある者のことばに対する五つの捉え方」を見てみたいと思います。それらをよく吟味しながら、ことばにおいてますますキリストに似た者となるように、ともに成長していきましょう。

## ○聖書の知恵を追い求めて：知恵ある者の“ことば”の捉え方

### 1. ことばは心の状態を表すもの

では早速、ことばの捉え方の一つ目は、知恵ある人は「ことばが心の状態を表すもの」であると知っている、ということです。最初に箴言 15 : 7 を見ると、こんなことばがありました。「知恵のある者のくちびるは知識を広める。愚かな者の心はそうではない。」と。同じ 15 : 28 を見ると「正しい者の心は、どう答えるかを思い巡らす。悪者の口は悪を吐き出す。」と。また一つ進んで 16 : 23 を見ると、「知恵のある者の心はその口をさとし、そのことばに理解を増し加える。」と書いています。箴言が言わんとしていることはいったい何でしょう。それは、「心に知恵のある者はその知恵を口にし、心に愚かさや罪のある者、悪のある者はその悪を口にする」ということです。複雑なことが言われているわけではありません。私たちのことばは、何でもない単なる文字の羅列ではありません。私たちのことばというのは、私たちの心の内側にあるものを公に明らかにする、そんな拡声器やメガホンのような存在でした。

イエス様も「ことばと心の関係」について、このようにたとえを用いて言われていました。ルカ 6 : 43 - 45 に「:43 悪い実を結ぶ良い木はないし、良い実を結ぶ悪い木もありません。:44 木はどれでも、その実によってわかるものです。いばらからいちじくは取れず、野ばらからぶどうを集めることはできません。:45 良い人は、その心の良い倉から良い物を出し、悪い人は、悪い倉から悪い物を出します。なぜなら人の口は、心に満ちているものを話すからです。」と。当たり前聞こえると思いますが、ぶどうの木を植えれば、ぶどうの実が取れます。同じ紫色であったとしても、ぶどうの木からナスが取れることは絶対にありません。また、たとえ嵐がやって来て枝が折れて幹が傷ついたとしても、ぶどうの木からはぶどうしか取れません。なぜですか？それは、何の実を実らせるかはまわりの環境や状況ではなく、何の木に結びついているかによるからです。そして、これこそまさにイエス様が教えておられたポイントでした。私たちのことばは、心という木が実らせる実でした。私たちが心で考えていること、心で望んでいること、心で感じていること、それらが実際にことばとなって外側に出てくるわけです。

ここで、少し自分の歩みを振り返ってみてください。皆さんが一番最近、ことばでだれかに当たってしまった、ことばでだれかを傷つけてしまった、ことばでだれかを悲しませてしまった、そんな時の事を思い返してみてください。果たしてその時にどんな思いを抱いていたのでしょうか。どんな考えを思い巡らせていたのでしょうか。「相手が先にあんなことをしたから、自分の発言は仕方なかったんだ」とか、「ほかの人も自分と同じ状況に置かれれば、同じようなことばを発したに違いない」とか、相手やまわりの状況を責めていたり、自分自身のことばを正当化する理由をいろんなところに探していたのではないのでしょうか。もしそうであるなら、イエス様のことばにいま一度耳を傾けてみてください。確かにまわりの人のふるまいや置かれた環境というものは、きっかけになるかもしれませんが、口にしたそのことばは、もうすでにあなたの心の中にあつたものが露わになったに過ぎない、ということ

す。まわりの人が、私たちにそのことばを言わせたのではありません。そのことば、その思いは、あなたのうちに、私たちのうちにもうすでにありました。まわりのものは、それを言うきっかけになったに過ぎないのです。言い換えれば、私たちが心の中に不平不満を抱えていれば、思いどおりにならない時、それが文句やねたみとなって口から出てきます。怒りや憤りを抱えていれば、それが暴言や中傷となって出てきます。また、心の中に自分勝手な基準や考えを抱えていれば、それから外れるような者が出てくる時、そこから外れるような状況に置かれる時、私たちはそのような人を冷たく扱ったり、そのような状況を非難することばが出てくるのです。

でも逆に、私たちの心が愛や喜びに満ちていたらどうでしょう。赦しやへりくだり、神様への感謝を抱いていたらどうでしょう。その時は、相手がどうであれ、まわりの状況がどうであれ、私たちの内からは、愛や励まし、賛美の思いがことばとなってそのまま出てくるのです。私たちの発することばは、それぞれの心の状態を表すものでした。ことばの問題というのは、心の問題でした。

そして、これがイエス様の言われる真実であるからこそ、重要なことがあります。私たちがことばにおいて成長したいと望むなら、単に言葉づかいに気をつけたり、話し方に注意しましょう、というだけでは根本的には何も変わりません。私たちに必要なのは、そもそもの心——そのことばを生み出すその心、その心を変えてくださるお方である神様に立ち返り続けることが不可欠でした。自分の考え、自分の感情、自分の意志ではなく、神様を愛して神様に従って、神様の栄光が現されることだけをひたすらに求めていくことでした。一言で言うなら「主を恐れること」が欠かせないのです。そして覚えていますか。箴言の最初に見ましたね。すべての知恵の始まりは、ことばにおいても同じです。すべてのスタートは「主を恐れること」だったわけです。知恵ある人は、ことばが心を表すものであると知っているからこそ、どんな時もその心を神様に向け、その心で神様を愛し、その心で神様を正しく恐れることを追い求める者でした。

## 2. ことばは重大な影響を持つもの

次に二つ目のことばの捉え方は、知恵ある人は「ことばが重大な影響を持つもの」とであると知っている、ということです。ことばは重大な影響を持つものなのです。箴言はこんなことばを繰り返しています。箴言 13 : 3に「自分の口を見張る者は自分のいのちを守り、くちびるを大きく開く者には滅びが来る。」と。そして 18 : 21には「死と生は舌に支配される。どちらかを愛して、人はその実を食べる。」と。さらにもう少し進んで 21 : 23には「自分の口と舌とを守る者は、自分自身を守って苦しみに会わない。」と書いていました。言われているのは、私たちの舌は、それぞれのいのちに関わるほど大きな力を持っている、ということです。舌は、神様を賛美してまわりの人に祝福をもたらす、そんな良いもの——「善」として用いることもできれば、全く同じ舌でもって、神様を悲しませ、まわりの人に呪いをもたらす悪いもの——「悪」として用いることもできるものでした。文字どおり、私たちの放つそのことばは、だれかを痛め、破滅させ、死にまで至らせる可能性が含まれているものになるのです。

実際、過去、自らのいのちを絶ったあるひとりの女性がいました。その女性が残した遺書は、当時の人の注意を引くものになりました。なぜかという、そこにはたった二言、こう記されていたからです。

「彼らが言った。」と。時にことばは死に至らせるものでした。しかし、この女性のケースが何ら特別なものではないことも、今の私たちはよく知っています。今の時代、ネットやスマホが発展し、いつでもどこでも自分の思いや自分のことばを発信できる世の中であって、会ったこともない人の心ないことばに傷つき、ひどく苦しんでいる人たちも数多くいます。また、顔を合わさずともいろんな人とメールやLINEで連絡できるようになったことは便利ですが、同時に相手の表情が見えないからこそ、投げかけられたことばに困惑し、長い間思い悩むこともあります。その文字は表面上、ほんのささいなことばかもしれませんが、でも、そのささいなことばが相手を滅ぼすほどの力を秘めているのです。あのヤコブも、このことばの重大さについてヤコブ 3 : 5 - 6で「5 同様に、舌も小さな器官ですが、大きなこと

を言って誇るのです。ご覧なさい。あのよう小さい火があのような大きい森を燃やします。:6 舌は火であり、不義の世界です。舌は私たちの器官の一つですが、からだ全体を汚し、人生の車輪を焼き、そしてゲヘナの火によって焼かれます。」と述べています。

近頃、いろんな場所で「山火事が起こった」というニュースを聞くことがあります。例えば、昨年、南米のアマゾンで起こった山火事は、約1万7,900km<sup>2</sup>——なんと九州の半分ほどの規模を焼いたと言われていています。また記憶に新しいのは、日本でも今年の2月に岩手で、平成以降最大の山火事が起こり、住宅など約200棟以上が全焼しました。あまりにも莫大な被害をもたらした火事。その始まりはいったい何だったのでしょうか。その始まりは、野焼きなどの火の不始末や焼き畑などの小さな火が原因だったと言われていています。最初はほんのささいな火、すぐに消し止められると思えるような小さな火。それが風にあおられて近くの木に燃え移り、次から次へと別の木へと燃え移っていったのです。大きな森を燃やし尽くすのに必要なのは大きな火ではありません。大きな森を燃やすのに必要なのは、一見何でもないかのように思える、そんな小さな火でした。

そして、それこそまさに私たちの「舌」にも言えることなのです。私たちが感情に任せて口にする怒りや不満に満ちたことば、それは時に相手に一生残る傷を与える可能性があります。私たちが口にする中傷や高慢さは、相手に痛みや苦い思いをもたらすこともできれば、私たちが口にするうそや陰口は、だれかの評判を下げるだけではありません。そこにある一致や交わり、関係というものをすべて壊すような力も持っています。

覚えていますか。かつてコリントの教会には、不一致や争いの問題がありました。なぜ彼らにはそのような不一致があったのでしょうか。パウロはその原因をIコリント1章にこう描いています。Iコリント1:11-12に「:11 実はあなたがたのことをクロエの家の者から知らされました。兄弟たち。あなたがたの間には争いがあるようで、:12 あなたがたはめいめいに、「私はパウロにつく」「私はアポロに」「私はケパに」「私はキリストにつく」と言っているということです。」と。おそらく最初から皆がめいめいに言っていたわけではないでしょう。最初は、ひとりとひとり、兄弟と兄弟の二人の間でなされたことばだったのかもしれませんが、しかし、そのような小さなことばが、教会すべてを巻き込み、教会の中に不一致をもたらす危険性を、私たちのことばは持っているということです。自分勝手、高慢な心から出てくることばには、一つとされた兄弟姉妹の間を引き裂くような力がありました。小さな舌は、大きな影響を持つものでした。だから箴言は言っていたのです。「死と生は舌に支配される。」と。そして、その重大さを知っているからこそ、知恵ある人はその舌を正しく制御しようとするのです。それが二つ目の捉え方でした。

### 3. ことばは正しく制御されるべきものである

三つ目は、知恵ある者は「ことばが正しく制御されるべきものである」と知っている、ということです。知恵ある者の舌との向き合い方が、箴言10:19に「ことば数が多いところには、そむきの罪がつきもの。自分のくちびるを制する者は思慮がある。」と書いています。また、少し飛んで箴言17:27-28にも「:27 自分のことばを控える者は知識に富む者。心の冷静な人は英知のある者。:28 愚か者でも、黙っていれば、知恵のある者と思われ、そのくちびるを閉じていれば、悟りのある者と思われる。」と書いています。では、これまでに「言わなければよかった」と、後悔した経験はあるのでしょうか。だれかと会話している途中で、自らの口から出ていくことばを引き戻せたら……と悔やんだ経験はあるのでしょうか。残念ながらみんな何度もあるでしょう。

では、よく考えてみてください。そのような失敗、そのような罪を犯してしまう場面では、私たちはどんな状態になっていることが多いでしょう。おそらく多いのは、私たちが何も考えずに思ったままを口にする時でしょう。相手のことばに耳を傾けることよりも、何よりも主を恐れることを忘れて、自分の考えや自分の意見、自分の思いをただ言い表しているような時、その時ほど、問題を引き起こしてし

まうことはないでしょう。何も考えずに返事をすれば、その心の中にあるものがそのまま出てくるのです。先に見た箴言15：28で言われていました。「正しい者の心は、どう答えるかを思い巡らす。悪者の口は悪を吐き出す。」と。正しい知恵ある者は返事をする前に、話をする前に、どう答えるかを思い巡らす者でした。また、「悪者」——知恵のない者は、思ったことを何も考えずにそのまま吐き出す者なのです。

また、何も考えない時だけでなく、感情的になっている時も同じでしょう。こんな経験はありませんか。一日中懸命に仕事をして、家事をして、疲れて休もうと思っている時、朝から嫌なことが重なってイライラしている時、だれかが問題を持ってくると、私たちは感情のままに応答してしまうことがあるのです。何も考えずに自分の感情をそのままぶちまけてしまうことがあるのです。だからこそ箴言は教えていました。「自分のことばを控える者は知識に富む者。心の冷静な人は英知のある者。」と。ここで言われていた「心の冷静な人」とは、「心が落ち着いていて、自分を保ち、ことばを制御できる人」のことを表していました。冷静な人は、自分の舌を感情やまわりの状況にゆだねて、それらに振り回されるのではありません。気分のままに軽率にことばを口にするのでもありません。神様の目を正しく覚えて、自分のことばを、罪に陥ることから必死に必死に守ろうとするのです。別の箴言もこんな厳しいことばを残しています。箴言29：20に「軽率に話をする人を見ただろう。彼よりも愚かな者のほうが、まだ望みがある。」と書いています。「愚かな者よりも、何も考えずに軽率に話すほど愚かなことはない」ということです。

まちがいなく言えることは、私たちが多くのことばを話せば話すほど、そこには罪の危険が高まる、ということです。自分のこととして想像してみてください。たくさんのことばを話せばどうなりますか。当然、その中で軽率に話をして、だれかを剣で刺すような機会も増えていきます。自分のことばかりを話し続けていれば、次第に高慢な思いが生じてきて、「自分の思いや意見を聞いてほしい。いや、聞いてもらわないと困る。」というような思いに心が支配されるようになっていくかもしれません。神様から与えられている「ことば」というもの、それ自体はずばらしいものです。だから箴言は、ただ「口を閉じて黙っていなさい」とか、「いっさい話すのをやめなさい」などと言っているのではありません。しかし同時に、ことばが重大な影響を持つものであるのだと本当に知っているのであれば、知恵ある者は、そのことばを正しく制御することに心を留めようとする者なのだ、というわけです。

果たして私たちは、箴言が描いているような、自分のことばを控える者でしょうか。それとも、何でもかんでも口にするような愚か者でしょうか。いったいだれが、自分の舌の主人になっているのでしょうか。心から愛し、恐れている主でしょうか。それとも、自分の舌を支配しているものは、自分の思いや感情やまわりの状況でしょうか。正直になると、私たちは普段の生活の中で、ことばを話すことに何の費用もかからないからこそ、あまり何も考えずに話すことがあります。「1回話すごとに千円」などと言われないので、私たちは何も考えずに口からいろんなことを出しています。しかし忘れてはいけません。私たちの口にする軽率なことばは、測り知れない損失を生む可能性があるものだ、ということです。痛みをもたらす危険があるものだ、ということです。しかも、例えば私たちがスーパーでまちがったものを買って帰ってきたなら、「あ、まちがえた」と言って返しにさえ行けば、何もなかったことにできますが、ことばは一度発してしまえば、後で取り消すことはできません。普段あまり考えていないかもしれませんが、私たちのことばは高価なものでした。その高価さというものをいつも覚えて、自分自身のくちびるを制する者、それが知恵ある者の歩みなのだ、というわけです。

#### 4. 悪いことばは取り除かれるべきもの

次に四つ目の捉え方は、知恵ある者は「悪いことばが取り除かれるべきもの」であると知っている、ということです。箴言は悪いことばに関して、こんなことを述べていました。箴言4：24を見ると「

偽りを言う口をあなたから取り除き、曲がったことを言うくちびるをあなたから切り離せ。」と。さらに少し進んで、6：16－19には「：16 【主】の憎むものが六つある。いや、主ご自身の忌みきらうものが七つある。：17 高ぶる目、偽りの舌、罪のない者の血を流す手、：18 邪悪な計画を細工する心、悪へ走るに速い足、：19 まやかしを吹聴する偽りの証人、兄弟の間に争いをひき起こす者。」と。またもう少し進んで、8：13には「【主】を恐れることは悪を憎むことである。わたしは高ぶり、おごり、悪の道と、ねじれたことばを憎む。」と書いています。主を心から愛している者、主を恐れる知恵ある者は、自分の愛する主が憎んでおられるものを取り除こうとする者でした。自分の主が愛しているものと違うものを必死に切り離そうとする者でした。「偽り」であったり、「曲がった」ことばを主が忌み嫌われているからこそ、その主が忌み嫌われるのと同じように、忌み嫌おうとするのです。なぜか。それは、悪いことばが私たちとまわりの人、何よりも私たちと神様との関係を壊すことにつながるからでした。

よく考えてみてください。私たちが口にするその悪いことばは、実際どのようにして関係を傷つけたり、壊そうとしたりするのでしょうか。例えば、「曲がった……くちびる」、「ねじれたことば」と言われていました。「ねじれたことば」とは何でしょう。これは、「まっすぐな真理、まっすぐな事実というものを歪めてしまうことば」でした。もっと具体的に言えば、神様が罪だとはっきり示しているものを、それを「良いものだ」と呼んでみたり、また、それを自分のこととして正当化することもこれに値するものでした。箴言はその例をいくつも挙げています。箴言24：24にはこう書かれています。「悪者に向かって、「あなたは正しい」と言う者を、人々はののしり、民はのろう。」と。少し進んで、30：20にも「姦通する女の道もそのとおり。彼女は食べて口をぬぐい、「私は不法を行わなかった」と言う。」と書いています。残念ながら、これらは今も多く場面で見取することができます。世の中を見渡してみても、神様が罪だと宣言している、例えば不品行や同性愛をねじ曲げて一つの個性や流行としていたり、また教会自体も真理を妥協して、罪を罪として扱わないことも多々あります。たとえそれぞれのうちに罪を見たとしても、いろいろな理由を並べたて、言い訳をし、そのまま罪を持ったままで大丈夫ですと、軽く捉えていたりするのです。まちがっている自分の生き方を正当化するために舌を用いること——それがまちがった、「曲がった」、「ねじれたことば」でした。

では、真理があったとしても、その真理をねじ曲げて自分の生きたいように、自分の思うようにする、そのことばを持って生きていけばどうなると思いますか。そんなことばが蔓延すれば、真理が妥協され、曇り、神様との交わりにも隔たりが生じるようになっていくのです。「ねじれたことば」も関係を壊すものでした。

また、曲がったことばだけでなく、偽りやゴシップ、うわさ話にしても同じでした。特にゴシップや陰口については、みことばは繰り返し述べています。箴言18：8を見るとこう書かれています。「陰口をたたく者のことばはおいしい食べ物ようだ。腹の奥に下っていく。」と。また、箴言16：28には「ねじれ者は争いを巻き起こし、陰口をたたく者は親しい友を離れさせる。」と書いています。どうして人は「陰口」に惹かれるのでしょうか。みことばは教えていました。「陰口」はまるで美味しい食べ物のように魅力的に見えるからこそ、頭でたとえ悪いとわかっている、私たちはそれに惹かれていくのです。本人のいないところでこそこそと話されることに進んで耳を傾けてみたり、その人が聞けば悲しむようなことばを自らが発していることもあるのです。目の前に本人がいれば絶対に口にしないような内容を「ここだけの話ね、ほかのだれにも言わないでね」といった決まり文句とともに、その後続けて言うのです。当然、そのようにして秘密を漏らしたり、陰でだれかを傷つけるようなゴシップというものが、関係を成長させるはずはありません。強めるはずもありません。むしろそのようなことばは信頼を大きく損ない、神様の家族のうちに争いや痛みをもたらすことにつながるものでした。関係が壊されるのです。

また、もう一つ取り上げるとするなら、箴言は「口論」についても触れていました。箴言26：21を見てみるとこう書かれています。「おき火に炭を、火にたきぎをくべるように、争い好きな人は争いをかき立

てる。」と。ここで「争い好きな人」と言われていますが、別に訳すなら「口論好きな人」とも言うことができました。「口論好きな人は争いをかきたてる。」(2017年版)と。「口論好きな人」と聞けば、どんな人を思い浮かべるでしょう。自分の考えや基準が正しいと信じているからこそ、どんなささいなことでも議論したり、非難したり、批判することが大好きな人のことでした。自分の考え、自分の思い、自分の基準が正しいと信じているので、だれかの意見や声に素直に耳を傾けようとするのではなく、どんな場面でも、自分の正しさをまず証明しようとするのです。「いやいや、あなたまちがっていますよ。まず私の話を聞いてください」、「いやいや、あなたのやり方は違います。これが正しいやり方です」などと。こうして、自らの正しさを常に訴えて、自分の思いどおりにならなければ不満を抱き、争いを引き起こすような「口論好き」は、関係にどんな影響をもたらすでしょう。当然、ありとあらゆる関係に、問題や争いを引き起こすこととなります。

箴言はいろいろな悪いことばについて触れています。しかし言えることは、どんな悪いことばであれ、それが罪である以上、関係に問題を、滅びを、争いをもたらすものでした。悪いことばは、夫婦関係にあれば夫婦関係をこじらせたり、家族の間にあれば家族に争いを引き起こしたり、友達との間にあれば友達を離れさせたり、兄弟姉妹の間にあれば心に傷を負わせるだけでなく、それが私たちのうちにあり続けられれば、何よりも神様に逆らう、忌み嫌われる、神様との関係に問題を引き起こすものになります。ですから、主を恐れている知恵のある者は、神様を愛しているからこそ、神様が忌み嫌っている悪いことばから離れようとするのです。愛する主を悲しませるようなことばをそのままにしておくのはありません。もしそのようなことばを口にしてしまえば、神様の前に悔い改めて、そして、悔い改めて後に神様を覚えて、神様を愛する者として、そのような悪いことばを脱ぎ捨てる者として歩んでいこうとするのです。

## 5. 恵みのことばは身につけるべきもの

ただし、知恵のある人は単に悪いことばを脱ぎ捨てるだけで満足するのでもありません。最後五つ目の捉え方は、知恵ある者は「恵みのことばを身につけるべきもの」だと知っている、ということです。ただ口を閉じて悪いことばがいったい口から出てこないようにするだけではありません。それだけでなく、むしろまわりの人や神様を喜ばせることばを、自ら積極的に口にしようと追い求めるのです。知恵ある者は、そのような恵みのことばを身につけようとする者でした。では、実際具体的にどんなことばを身につけるべきでしょうか。それも箴言の中にはいろいろ言われていますが、少なくとも二つのものを見いだすことができます。

まず一つ目に身につけるべきことばは、「まわりの人を建て上げることば」です。箴言12:25にはこう書いています。「心に不安のある人は沈み、親切なことばは人を喜ばす。」と。また13:14には「知恵のある者のおしえはいのちの泉、これによって、死のわなをのがれることができる。」と書いています。旧約の箴言だけではなく、このテーマについては新約聖書でも同じでした。パウロもエペソ4:29でこう言っています。「悪いことばを、いったい口から出してはいけません。ただ、必要なとき、人の徳を養うのに役立つことばを話し、聞く人に恵みを与えなさい。」と。

ここまで、私たちのことばが持つ重大性について考えてきました。たくさんの方が否定的な面でもありました。しかし、聖書が教えていることは、私たちのことばはなにも悪い面においてだけ大きな力を持っているという話ではないということです。私たちに与えられているこの舌を正しく用いるなら、それをを用いる時、それを聞いている人たちのうちに、とてつもない大きな喜びや励ましや感謝や慰めや平安や希望……といったものをもたらすことができるものなのだ、というわけです。私たちの「舌」には、神様の真理をだれかのもとへと運び、それを聞く者にいのちを与え、その人を信仰のうちに建て上げる、そんなすばらしい力というものも備わっているのだ、ということです。

そして、たぶん全員が経験したことがあると思いますが、実際に私たち自身がだれかのことばによって慰めを受けたことはありませんか。思い悩んでいた時、だれかから助言を受けて、何が本当に大切なことなのかに気づかされたことはありませんか。もちろん、聞いた当初は意図が理解できず、傷ついたようなことがあるかもしれません。しかし、それが自分を思って愛のうちに語られていた真理であることに気づいた時、心から感謝したことはありませんか。箴言27:9にも「香油と香料は心を喜ばせ、友の慰めはたましいを力づける。」と書いています。ここで「友の慰め」と書いていますが、この「慰め」ということばは、別のことばで「助言」や「忠告」と言うこともできるものでした。「友の慰め、友の助言、友の忠告、それは私たちのたましいを力づけることができる」と。私たちのことばには、弱った者を強めることができ、おびえている者に平安をもたらすことができ、無知な者に知識をもたらすことができ、さまよっている者を真理に引き戻すことができ、また、何よりもキリストに似た者へと成長していくことを助けることができる、そんな力というものがありません。そうだとすれば、自分の舌をどのように用いているでしょうか。

振り返って考えてみると、私たちが普段交わす会話は、聞いている相手が神様から目をそらすようなことばでしょうか。それとも、神様を見上げて、神様のすばらしさを知って、喜びや感謝にあふれるのを助けたり励ましたりすることばでしょうか。

また、二つ目に身につけるべきことばは、「時宜にかなったことば」です。箴言25:11にこう言われています。「時宜にかなって語られることばは、銀の彫り物にはめられた金のりんごのようだ。」と。「時宜にかなったことば」とは何でしょう。それは、「その時、その場に最も適切なことば」のことです。つまり、私たちのことばというのは、ただ語っている内容さえ正しければそれで良いという話ではなく、そのことばは、ふさわしい時にふさわしい形で語られるべきものなのだ、というわけです。例えば具体的に、箴言15:1にはこのように書いています。「柔らかな答えは憤りを静める。しかし激しいことばは怒りを引き起こす。」と。たぶん私たちも経験があると思います。だれかの問いに対して正しく答えることはいくらでもできます。いろんなものに追われていて心がざわついている時やイライラしている時、感情のままに返事をするそのことば自体は、質問されたことに対する正しい答えになっている時も多くあるでしょう。でも、その正しいことばが争いを引き起こすこともあるのです。なぜか？問われるのは、「時期にかなったことば」かどうかだ、ということです。今話すべきなのか、今はただ黙って聞いているべきなのか。話す内容は神様の御前に受け入れられるものか、話す内容は相手の成長のためを思っているものなのか。そして、話すことを決めるなら、その内容をどのような態度で話そうとするのか、それを吟味することこそ、「時宜にかなったことば」の要素でした。知恵ある者は、まわりの人を建て上げて、時宜にかなった恵みのことばをもって歩んでいこうとするような者だったのです。

果たして私たち自身はどうでしょうか。自分のことばに対して、これまでも、今も、どんな捉え方をしているのでしょうか。私たちのことばは、それを聞く人に恵みやいやし、喜びや励ましをもたらすものになっているのでしょうか。それとも、聞いている人たちがいつもビクビクするような、感情や状況に振り回されたままの、飛び回る剣のようにになっている2でしょうか。悲しいことに、私たちは救われた後も、今も、もうことばで数え切れないほどの失敗をしてしまいます。日常的になしている行為の背後には、確かに言われていたとおり、大きな戦い、日々繰り広げられることばの戦争が存在しているのです。いったいこのことばの知恵において、私たちはどうすれば成長していくことができるのでしょうか。

箴言が教えてくれること、その鍵は、私たちがすべての知恵の初めであり、自分の心を唯一変えてくださるそのお方——主を正しく恐れることでした。どんな時もみことばを通して主を知って、その主を愛し、その主を信頼し、その主に従い、その主の栄光が現されることをただひたすらに求めていくことでした。そして、私たちが主を本当に恐れて、主とともに歩み、その主のすばらしさを知って、主に対

する感謝や愛で心が満たされているなら、その心からはどんなことばが出てくるでしょうか。言うまでもなく、主への感謝が、まわりの人が聞きたいと思ういやしのことばが出てくるのです。だからこそ、今週もみことばに目を留めて、みことばを通して示されている神様の姿に心を留めて、真理に思いを留めて、この主のあかしをする者として、ことばにおいて成長する者として、ともに歩いていきましょう。